

教団新報

定 価 1 部 140 円 (本 体 133 円 千 共 200 円)
予 約 購 読 料 1 年 分 千 共 5,000 円
紙 代 の み 3,500 円
振 替 00140-9-145275
本 紙 を 購 読 ご 希 望 の 方 は、前 金 を
そ え て、お 近 く の キ リ ス ト 教 書 店
へ お 申 し 込 み 下 さ い。
教 会 の 購 読 料 は 負 担 金 に 含 み ま す。

発 行 所 日 本 基 督 教 団
169-0051 東 京 都 新 宿 区 西 早 稲 田 2-3-18
日 本 キ リ ス ト 教 会 館 内 電 話 03(3202)0546
FAX 03(3207)3918
発 行 人 内 藤 留 幸
編 集 主 筆 竹 澤 知 代 志
印 刷 所 株 式 会 社 き か ん し



館坂橋教会 (奥羽教区、岩手地区)

平和 メッセージ

ルカによる福音書 21 章 34 ～ 38 節

風化・目を覚ましていなければ



村上義治

宗教弾圧の証言

その一「恥は我がもの、栄光は主のもの」
(第 8 代 牧師 大住三郎)
…この間、新しい求道者も起きたが、国家は急速度に太平洋戦争へと傾斜して行き、遂に開戦となったので教勢は遅々として進まなかった。そして遂に翌年の六月二六日朝、忘れられぬ教団第六部教職検査が起った。

後年判明した事だが、少者が検査から外されたのは、余りにも若い家族が多かったので控えたとの事であった。然し厳しい取り調べは二十回近くも時の特高に呼び出しを受け、そのたびに家内と目くばせで、今日は収監され帰宅不可かもしれないから後事を頼むとの無言の挨拶をして出かけたものであった。

やがて教会は解散を命ぜられ教籍も剥奪された。そして人的資源不足の折故、就職せよとの事であった。幸い県産連の菜園支所にて採用された…。
戦時中教会堂は其の筋の命令で倉庫として使用されたが、これは微用に準ずるものだったのか。もちろん無料であったのみか何時疎開の為撤去命令が下るのかわからぬ状態であった。かくて四年後敗戦となり占領軍により、思想、信仰

の自由は認められるようになったので一九四五年(昭和二十)十二月二五日のクリスマスを期し、五人で教会の再発足をしたのであった。
(1985 年発行当教会 70 周年記念誌より)

今日あるのは、いろいろな方々のお支えがあったからだと言ふことを述べます。
いつとは月日までは言えませんが、朝早くだったと思います。会堂の玄関から見たことの無い男の人が二人訪ねて参りまして手帳を出して何やら父と話しておりました。母にお茶を出すように言われたので行きまして挨拶をしましたら笑顔で挨拶を返してくれました。けれどいつものお客様と違って聖書を読んだり

お祈りをしている様子が無いので変だなと思いました。
その日、学校から帰りまして母が目を見つ赤にして末の子の世話をしておりました。母の泣き顔など一度も見たことがなかったものですから私は驚いて「どうしたの」と尋ねますと母は「教会が大変だ。父さんが帰ってこないかも知れない、皆でお祈りしましう。」と答えたことを覚えております。

不安な心で床について朝になったら父がおりましたので子ども達は皆で喜び合った事でした。…特高の人達は度々きました。父が外出したり、獄に入れられた牧師さんの家族の慰問のために北海道に行ったときなども尾行していたそうです。
…教会を解散させられた時、父母は、使徒言行録四章二九節の「主よ、今こそ彼らの脅しに目を留め、あなたの僕たちが、思い切っ

て大胆に御言葉を語ることができるようになってください。」とどんなにかこの言葉を念じていた事であろうと思わされます。平和な時代になって牧師として講壇に立つて心置きなく用に当たたる事が出来、一九九一年八月十七日に平安の中に召されて参りました。…。
(1995 年発行当教会 80 周年記念誌より)

弾圧を覚えて

右記の宗教弾圧は 1942 (昭和 17) 年 6 月 26 日未明に始まった、国家が治安維持法をかざして行い、塗炭の苦しみを経験した地方教会の牧師とその家族の証言です。
教団内の「ホーリネスの群」の諸教会は、同じような、いやそれ以上の苦しみを経験してきました。記念誌には、教団から教師籍が除かれたことに対する無念さは記されていませんが、盛岡市内の教団諸教会が信徒の方々をその礼拝に暖かく迎えてくださったからだろうと推測しています。
この出来事から、今年で丁度 70 年になります。時の

経過は、時として残酷でどんなに大きなしかも重大なことでも忘却させてしまいがちです。弾圧・迫害の経験を風化させてはならないと、群では、6 月の最終主日に「弾圧記念礼拝」を持つよう呼び掛けています。
私は館坂橋教会に赴任して 15 年目を迎えています。が、諸資料に目を通したり、証言に耳を傾けるなかで意図的、継続的にこれに取り組むようになりました。現在では、私がキリスト教主義大学で「キリスト教学」の非常勤講師をさせて頂いていることもあり、その礼拝に大学生を招いています。そして、レポートを提

出して貰っています。
経験者の証言・弾圧に関する資料・牧師のコメント等、工夫を凝らしながらの礼拝を行っています。数十年も経って証言者も少なくな

なる中、これらのことが陳腐なもの・関係ないものと受け止められないかとの心配もありました。
実際は、若者のレポートを見ますと、「こんなことがあつたのか。知らなかった。あの困難を乗り越えた人たちの生き方に感動した。国のあり方に目を止めなくてはならない言葉があります。想像以上に若者はこの事実

原発事故の後、脱原発を目標して進むべきだと願っている実業家が「あの大事な」と思っています。

東日本大震災

2011 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分。
忘れもしません。
大地震・大津波をして原

子力発電所大事故。この結果は今報道されていることより、もっと深刻な出来事を惹起すると思つていま

す。震災に対する問いに、一人の女子学生は、「私は、今回の震災で母と家を亡くしました。…」と記しました。切ない思いで一杯です。
そんな中、この震災が過去のこのように考えられている事実にもふれる時があります。いかにも寂しい限りですが、すでにここに風化していく危険性を感じます。

主は、「夜は出て行って」主は、終末への備えを呼び掛けられました。
「心が鈍くならないように注意しなさい」「いつも目を覚まして祈りなさい」と。時代の問題性と向き合うための呼び掛けとも言えます。
(館坂橋教会牧師)

イエスの覚醒

『オリーブ畑』と呼ばれる山で過された」とそのお手本を示しておられます。願わくは、私たちの歩みも祈りの中で、父なる神のみこころを伺い、確信と力そして覚醒を頂き、行動へと導かれますように。

北海教区 年頭修養会

お話しください わたしたちは聴きます



開会礼拝、手話でも讚美

第60回北海教区年頭修養会が、2012年1月9日～10日、シャトレ・カトーキングダムサッポロで開催され、全道各地から、また、道外からの客人も含め、総勢486名が集いました。

今年は札幌地区が企画・実施を担当し『お話しください わたしたちは聴きます』～大震災から10ヵ月～というテーマを掲げ「聴くこと」を中心としたプログラムが行われました。昨年3月11日に起きた東日本大震災は、多くの人々に深い痛みと悲しみをもたらしました。北海道に住む私たちにとっても、あまりに大きなできごとでした。このことをどう受けとめ、教会

の歩みをどう進めることができるのか、いまだ戸惑いと不安の中にあって、今、私たちがなすべきことは「聴くこと」であるこの思いから企画されたプログラムです。そして、2日間の修養会は、『聴くとき』『分かち合いのとき』『祈るとき』『遣わされるとき』の4つの「とき」で構成されました。

と被災地の現状、北海教区との支援の関わり、ボランティアの若者たちとの交流や伝道、そこに働かれる主の恵みについて語ってくださいました。片岡さんは、「放射能からこのもののいのちを守る会・会津」と「会津放射能情報センター」の代表として、福島原発による放射能汚染の現状と、子どもたちを放射能から守る

ための様々な取り組みについて語ってくださいました。

『聴くとき』後半は、山浦玄嗣さん（カトリック大船渡教会信徒・山浦医院院長）による「津波を超えて、闇から光へ」と題する講演が行われました。山浦さんは聖書をケセン語（気仙地方のことば）に翻訳されたことで知られていますが、

時にケセン語を交えながら、大津波の壮絶な経験を語られました。しかし、その語り口は、戦中・戦後、「ヤソ」であったために埋不尽な迫害を余儀なくされたことも時代を逞しく生きて抜いた山浦さんならではの感慨とユーモアに溢れたものでした。未曾有の大震災に遭ってなお、自分のことばで「福音」を伝えること

に情熱を持ち、起こった全てのことを受け入れ、明るく元気に生きることが教えてくださった山浦さんの力強いことばに、私たちは光を見、感動と励ましを与えられました。

夕食後は『分かち合いのとき』として5つの部屋に分かれて、以下のようなナイトプログラムが催されました。

①山浦さんを囲んで「講演で聴けなかったことについて更に深める集い」

②被災地から「村谷正人さん（前述）、後藤祈さん（札幌北部教会）、北口沙弥香さん（真駒内教会）からの支援活動報告

③放射能とどう向き合うか」片岡輝美さん（前述）、川原茂雄さん（北海道類似工業高等学校教諭、藤井創さん（酪農学園大学教員）による原発についてのパネル・ディスカッション

④聖書の学びと祈り」後宮敬爾さん（札幌北光教会牧師）による聖書研究

⑤年頭修養会60回の歩みを振り返る展示ブース

『祈るとき』で開始された修養会2日目。早天祈禱会では、1日目に与えられたことを静かに黙想し、小さなグループに分かれて共に祈りを合わせました。

ふと心が闇にとらわれそうになることも少なくないと思います。だからこそ祈ることを忘れず、人間の経験や知恵、可能性を超えて、神が示してくださる救いの御業を信じ、それを証しする者となりたいと思います。どんな状況の中でも、

アブラハムのごとく新たな挑戦を忘れない者でありたいと願います。

新しい年も主が私たちに先立って道を示してくださいますように！

（ウエスレー合同メソジスト教会日語部牧師 西之園路子）



山浦玄嗣さん。ケセン語を交えながら、大津波の壮絶な体験を！

プログラムの最後に、私たちは遣わされ、被災地の人々とつながり続けること、被災された方々を忘れないことを確認する『遣わされるとき』として、主イエスの名によってひとつとされる礼拝を捧げました。

聖歌隊で讃美をするもの、分かち合いで互いに耳を傾け合うものに分かれ、全員が礼拝の備えのときを持ちました。礼拝では、こどもたちによる讃美や全道の仲間間で結成された大聖歌隊の讃美が歌われることに、こどもたちが作った小さな蠟燭に火が灯され、光の輪が広がりました。参加者全員で、灯を見つめながら、被災地にある人々とつながっていくことを祈りました。

こどもたちもクラフトを製作して支援バザーで販売するなど、被災地とつながる活動を行いました。第60回という節目に全道各地の信仰の仲間と再会し、交わり、励まし合っただけでなく、おとなもこどもも共に平和の働き人となるために思いを合わせることができたことは大きな実りでした。

この修養会のために祈り、様々な形で支えてくださった多くの方々、そして、良い出会いと導きを与えてくださった主に感謝を捧げます。

（島田桂子報）

日系アメリカ人の歴史を受け継ぎつつ

サンノゼ、日系人教会のお正月

2012年を迎えまして、

昨年春の東日本大震災のため、今なお多くの人々が

痛みと悲しみ、不安を抱えつつ歩んでおられることでしょう。しかしまた、その

中で復興を目指し、前に向かって進もうとしておられる方々もたくさんおられる

ことと思います。こちらにも東北出身で、ご家族のこ

と、故郷のことで心を痛めている方々がおられます。主の平安とみえが被災地の皆さんの上に、復興に取り

組む方々の上に豊かにありますように祈ります。

ウエスレー合同メソジスト教会は、日本からアメリカに移り住んだ人々によって始められた教会です。それゆえ、日本にいたとき以上に日本的なもの（行事・食べ物）に囲まれながら、教会生活を送っています。

年末、29・30日は、ウエスレー合同メソジスト教会恒例の餅つきでした。今年は3000パウンド（約1.36トン）のお餅が出来ました。この餅つきは、教会財政を支えることを目的としていますが、若い世代に日系アメリカ人の伝統・文化を伝えていくという役目も果たしています。

1月1日は主日礼拝を守り、15日礼拝後は「お雑煮」を食べ、22日昼には、日語部の主催で英語部&日

語部合同の「新年親睦会」が開催されます。新年親睦会は敬老会も兼ねており、80歳以上の教会員、教会関係者に招待状をお送りします。招待者数は約70名、昨

年はそのうち47名が新年親睦会に参加してくださいました。

こちらへ来てからパワフルな80代、90代の兄弟姉妹に何人もお会いしました。

餅つきのとき、鏡餅を誰よりも手早く形良く作りあげるのは、90歳のNさん。ほぼ一日中立ち仕事ですが、午前中から午後まで仕事をこなされます。Eさん

は、昨年90歳の誕生日記念に「スカイダイビングに挑戦したい」と言い、さすがにイメージできるようになり

ました。

現在90歳前後の兄弟姉妹たちは、日本で、アメリカで、シベリア等で、戦争を経験してこられました。空爆や砲撃から間一髪逃れた方、日本兵としてシベリアに抑留されていたという方、アメリカで日系人収容所に容れられた方、アメリカの日系人部隊に所属していたという方、広島島の原爆でご家族を亡くしたという方にも出逢いました。多くの苦難・苦労を経て、今明るく前向きに生きておられるその姿に、私たちも、神が備えてくださる未来を信じつつ、一歩を踏み出す力が与えられるように思います。

将来のことを考えると、



「ご覧ください。3,000パウンド（約1.36トン）のお餅を」と、筆者



最高齢 90 歳の方との再会

みんなで生きる

JOCs
日本キリスト教海外医療協力会

～支え合いから始まる平和～

大江 浩(総主事)

2010年度は、JOCs創立50周年という記念すべき年でした。半世紀にわたる活動が続けられたことを感謝すると共に、50年間、私たちの活動が必要とされる状況が続いたという事実にも痛みを覚えてい
ます。公益社団法人として初年度となる今年度は、従来の海外での保健医療協力と同時に、東日本大震災
への対応から幕を開けました。JOCsのこれまでの10か月を振り返ってみたいと思います。

東日本大震災被災者支援から

JOCsの被災者支援活動は、私たちの仲間である
仙台JOCsが拠点とする
東北教区センター／東北教
区被災者支援センターへの
協力から始まりました。そ
の後釜石に移り、初期段階
(～5月末)では避難所で

への看護チームの訪問ケア
活動にも同行しました。被
災者の方々は口々に震災当
日や直後の様子を語って下
さり、生々しい様子や凄ま
じさは聴くたびに胸が押し
つぶされそうになりました。



新生釜石教会前に設置された
赤テントの「街角保健室」

の巡回診療や新生釜石教会
前の街角保健室の活動を行
いました。
第2段階(6月～)はカ
リタス釜石(カトリック釜
石教会)を拠点に、カウ
ンセラーの派遣や看護チ
ームによる仮設住宅や孤立集落

震災から5か月後お連れ
合いを自死により失くされ
た方、心の奥底に気持ち
押し隠して身内にも吐露で
きな方、仮設住宅に引き
こもったままの方、など一
人ひとりの「生きる」物語
があります。家族の死をD
NA鑑定で確認された方、
検死に従事された医療者の
過酷な現場のお話も伺いま
した。

被災地は今、長く厳しい
冬の寒さと出口の見えない
「絶望のトンネル」の只中に
あります。抑うつ・アルコール依存・自殺を防ぐための
「心のケア」、仮設などでの
「孤独死」や支援者の燃え尽
き症候群などへの対策も重
要です。「よそ者にはできな
いこと」があるものの、「よ
そ者にしかできないことも
ある」と信じて、カリタス釜
石の方々と協働を続けて
いきたいと思ひます。

被災地・釜石の様子

私も数回被災地を訪問し
ましたが、初回はこの世と
は思えぬ惨状にただただ言
葉を失いました。少し現地
の様子をご紹介したいと思います。

新生釜石教会前の赤テ
ントの「街角保健室」は、地
元住民が立ち寄り、お茶を

た若者が「見つかっただけ
良かったね。うちはまだ家
族が2人行方不明のまま
だ」と。さりげなく交わさ
れるとても重い言葉に、私
はただ聴くばかりでした。
その後、何度か孤立集落

死別・喪失体験とトラウ
マ(心的外傷)に生きる被
災者の方々は、「3月11日の
午後2時46分」あの瞬間
で時が止まったままです。
それは「1月17日の午前5
時46分」も同様です。被災
者はもちろん、被災は免れ
たものの負い目を持つ人、
生き残った故の罪責感
(Survivor's Guilt)
に苦しむ人、傷ついた被災
者の悲しみを聴き自らも傷
つく支援者など様々で、そ
れぞれの傷跡は海ほどに深
いものです。

もかたが困窮の状態にあり
ます。電気やガス・水道な
ど基本的なインフラの整わ
ぬ上に、過酷な自然環境や
政情不安などの問題にも直
面します。「救えるはずの命
が救えない」という実に甚
藤に満ちた現場がそこにあ
ります。祈りつつ、微かな
希望を信じて人々の命と向
き合う、人々の傍らに居続
ける、それがワーカーや現
地スタッフの日常です。

被災地は今、長く厳しい
冬の寒さと出口の見えない
「絶望のトンネル」の只中に
あります。抑うつ・アルコー
ル依存・自殺を防ぐための
「心のケア」、仮設などでの
「孤独死」や支援者の燃え尽
き症候群などへの対策も重
要です。「よそ者にはできな
いこと」があるものの、「よ
そ者にしかできないことも
ある」と信じて、カリタス釜
石の方々と協働を続けて
いきたいと思ひます。

海外での医療協力と被災者支援

ここで、JOCsの海外
での働きと被災者支援とを
つないで考えてみたいと思
います。

JOCsは今年度、バン
グラデシュ・ネパール・パ
キスタン・タンザニアなど
への医療従事者(ワーカー)
派遣と共に、6か国88名の
保健医療スタッフへの奨学
金支援やバングラデシュで
の学校保健教育を行ってい
ます。

に役立っている一例でしょ
う。患者を「待つ」のでは
なく患者のもとへ「赴く」
刻々と変化する事態や多様
なニーズに臨機応変に対処
する、などです。地域の人々
への理解・配慮・感謝も途
上国での経験から学んでい
ることと言えます。

ワーカーを派遣するタン
ザニアでも、パキスタンで
も、ネパールでも、バング
ラデシュでも途上国におけ
る医療事情は極めて乏し
く、人もモノもおカネも何
派を超えた協働が進んでい

ます。異なる言葉や宗教
文化、生活習慣を持つ地域
での活動経験も生かされた
のではないのでしょうか。そ
れは被災地釜石でもカトリ
ックや仏教とも自然な形で
繋がっていった背景にあり
ます。

ちなみにバングラデシュ
では、昨年末寒波被害が到
来し(日本では報道もされ
ません)、JOCsは、現
地団体の要請に基づいて、
寒波被害の深刻な貧しい
人々の救済のために支援金
を送金しました。過去30年
間の世界の自然災害の被害
の約9割はアジア地域に集



救援活動の青写真

の子はパンを兄弟
で分け合いまし
た。その光景は貧
しくとも分かち合
うアジアやアフリ
カの人々の姿と重
なりました。そこ
に豊かさがありま
す。私たちは途上
国に豊かさを求め
て歩んできたので
す。世界各地で誰かが助けや
支えを求めています。遠く
のどこかでも、すぐ身近な
所でも。私たちはこのよう
な国難の時こそ、海外の苦
難にある人々の痛みに寄り
添いたいと思ひます。
「あなたたちができること
は私たちができません。
私たちができることはあな
たちにはできません。で
も一緒になれば、神様のた
めに何か美しいことができ
ます」(マザー・テレサ)
私たちは違いを越えて力を
合わせ、祈りを合わせたい
と思ひます。「みんなで生き
る」ために。そこに不思議
な力が働くはずで
す。私たちは人々の「静かな
SOS」と向き合いたい
と思ひます。神様からの
「声」として。そこから平
和への道が始まります。

2・11 メッセージ

今年の10月に在日大韓基督教教会の総
会にお招きを受けた。その時、同教会
憲法規則集をいただいた。
同教会憲法第4条がわたしの心を刺
した。
憲法第4条「信徒が自己の信
仰を捨てるか変更するように強
要を受ける場合、信仰を捨てて
転向したふりをして自己を欺瞞
する行為は、神の前で罪に
はできない。信仰は絶対の境地
を持つており、そのような虚偽
の生活をするより、むしろ良心
に従って殉教するのが当然であ
る。」この憲法4条について「日
帝時代の信仰の闘いから出来た
ものだ」との説明を受けた。
心が痛む。日本基督教団の負
の歴史を見つめざるを得ない。
「信仰を捨てるか、変更するよ
うに強要され、それを拒否したもの
が殉教するのが当然である」との信仰
の告白の土台の上に教会が立てら
れている。
フィリポ・カイサリア地方で主は「そ
れでは、あなたがたはわたしを何者だ
(日本基督教団総会議長 石橋秀雄)

ペトロは信仰告白の挫折と主
の赦しと憐れみの中で、この断
固たる信仰告白をするものへと
変えられていく。圧倒的主の御
業によって救われたものが、断
固たる信仰告白をなし、もし「自
己の信仰を捨てるか変更するよ
うに強要を受ける場合、…良心に従
て殉教するのが当然である」との信仰
の告白に生きる者となることを「信
教の自由を守る日」にあたつて考えさせ
られている。

「あなたたちができること
は私たちができません。
私たちができることはあな
たちにはできません。で
も一緒になれば、神様のた
めに何か美しいことができ
ます」(マザー・テレサ)
私たちは違いを越えて力を
合わせ、祈りを合わせたい
と思ひます。「みんなで生き
る」ために。そこに不思議
な力が働くはずで
す。私たちは人々の「静かな
SOS」と向き合いたい
と思ひます。神様からの
「声」として。そこから平
和への道が始まります。

牧師のパートナー

私の牧師のパートナーとしての始まりは、伝道師として萩教会に就任した年と重なります。神学校を卒業して、遭わされた教会が、山口県の萩教会です。今年の春で7年目になります。

イエス様に寄るすがすがしい弱い私が、牧師として用いていただいているのは、イエス様の導きと、教会員の皆様はじめ、周りの方々に許されているためだと感謝しています。神奈川県川崎市出身で、そこから一度も出たことのない私は、萩で体験する一つひとつが貴重な学びです。

そのような中、山口教会と島根県の津和野教会から萩教会に代務の依頼がありました。そこで、萩教会から夫が山口教会に、私が津和野教会へ代務者として派遣されることになりました。昨年の4月から二人で3つの教会に任えています。

山口も、津和野も、萩から山を越えて車で約1時間かかります。バスや電車の便も限られます。午前中に山口教会が萩教会で説教奉

初心者マークをつけ、県境を越えて

新保 恵子

(萩教会担任教師)

津和野教会を覚えてお越しなさいました。津和野の小さな礼拝堂では、場所が確保できず記念写真が撮れなかったほどでした。

普段3名で礼拝を守る津和野教会は、改めて皆様に覚えていただき、支えられていることに感謝



左から、津和野教会の教会員の原田一二三さん、長安玲子さん、筆者

仕をして、午後には津和野教会に通います。そこで、自動車学校へ通って、運転免許を取りました。初心者マークをつけて通っています。

津和野教会は、教会員4名、平均礼拝出席者は牧師を含めて3名の小さな群れです。その津和野教会は、昨年120周年を迎え、近隣の教会の皆様をお招きして、記念礼拝を捧げました。築100年以上の日本家屋の教会です。座席は、12名分の長椅子しかありませんでした。

でも、当日は、38名もの方々が

し、励まされました。その後の祝会で、以前に津和野教会で長い間、信仰生活を守っておられた方のお話しを伺い、襟を正される思いが致しました。

「私が子どもの頃のことです。伯父は津和野教会の前で、拷問を受けているキリスト者の叫び声を聞いて、耳に残っていると話していました」。

長崎の浦上の信者たちが津和野に送られた理由は、神道が盛んな津和野で棄教させるためでした。1868年に、まず27名が津和野に送られて光琳寺に収容されました。キリスト者の迫害の事実は、20年ほどは人々の記憶から忘れられないと思います。でも、迫害と殉教があった20年後、津和野に始めてイエス様を信じる群れ、教会が起きました。それが日本基督教団の津和野教会です。この歴史にイエス様の御業を感じます。

このように、萩、山口、津和野を行き来する夫と私は、主日礼拝を同じ教会で守ることが少なくなりました。でも、それぞれの教会のことを祈り合い、イエス様の御業に触れさせていただく恵みに感謝しています。

消息

大野 昭氏 (隠退教師)



11年11月12日逝去、84歳。広島県に生まれる。'50年日本基督教神学専門学校卒業、'55年岡山手教会に赴任、佐世保教会、三原教会を経て、'69年より'93年まで香貫教会を牧会し、隠退した。遺族は妻・大野かをるさん (隠退教師)。

宮本信一氏 (隠退教師)



11年11月16日逝去、85歳。愛知県に生まれる。'51年中央農村教化研究所卒業、同年志布志教会に赴任、高鍋教会、有田教会、羽犬塚教会、唐津教会、別府野口教会を経て、'90年より'99年まで瀬高教会を牧会し、隠退した。遺族は、妻・宮本恵さん (隠退教師)。

小田部俊夫氏 (隠退教師)



11年11月21日逝去、75歳。茨城県に生まれる。'63年関西学院大学大学院神学科修了、'64年西淀川教会に赴任、大牟田正山町教会を経て、'81年より'01年まで大阪東十三教会を牧会し、隠退した。

遺族は妻・小田部三恵子さん (隠退教師)。

奥村直彦氏 (安土教会主任)



担任教師) 11年11月29日逝去、82歳。東京都に生まれる。'97年カリフォルニア神学大学院ゼントチャールズ大学卒業、'00年近江八幡教会に赴任、'04年より安土教会を牧会した。遺族は妻・奥村文子さん。

事務局報

正教師登録

北村誠知花龍磨、鍋谷仁志、尹太悉

(2011.11.28受接)

教師異動

三崎二葉会就教生野隆彦久居新生 辞主水田雅敏 就代加藤幹夫 延岡城山 辞主松隈正徳 就代山田啓人

《教会事務主任募集》

◎年齢・性別を問わず
◎パソコン・経理事務経験のある方
◎その他、給料・社会保険等委細面談
◎必要書類等〓履歴書、所属教会牧師の推薦状
◎募集期間〓2月末まで
◎書類提出先〓〒145-10071 大田区田園調布3-4-16 日本基督教団田園調布教会 (牧師・田村博)

ひととき

田坂 興亜さん

有害化学物質対策に使命を覚え



1940年生まれ。元アジア学院院長、元国際基督教大学教授、牛込弘方町教会員。

熱心なクリスチャンの家庭に生まれる。言論統制下の戦時中、教師だった父は子供たちに事実をありのままに作文させる「生活綴り方運動」に加わり、雑誌に軍部批判を書いたために捕まったこともあった。父が獄中であり、母は勤労奉仕の間一歳に満たない田坂さんは、松の木に括り付けられていたため低体温になった。そのため母から、繰り返し、「一度は失いかけた命を助けられたのだから、神様から任せられた使命がある」と言われて育ち、大学3年で受洗、幼い頃の母の言葉が、信仰を与えられる素地となったと振り返る。

大学では、有機リンの化学を専攻。松本サリン事件の際には、最初にサリン説に言及し、マス

コミで注目されたこともある。1970年に国際基督教大学の教員となつてからは、自然界に放出された有害化学物質を調査することに専念。カネミ油症事件で問題となったPCB、農薬用殺虫剤として大量に使われてきたDDT等の物質が、どの程度母乳に含まれ、胎児に影響を与えるのかを調査して来た。

研究年にタイの大学に行つて以来、アジアの食物にどれくらい残留農薬があるかを調べ、安全な食を安定供給し、飢餓を救済していくための「興亜」を目指すことになった。有機農業を實踐するアジア学院の教員となり、卒業生が活躍する地域では、子供が飢えていない事実を知らされ、この働きを重要さを改め

「雪国にある教会では、冬の期間は、日曜日の朝に教会の玄関を開けて、それで礼拝を始める、というわけにはいかないからね。ある先輩牧師の言葉であった。確かにその通りだ。まず除雪をしなければならぬからだ。東京での神学生時代、冬でも日曜日には教会の玄関を開け、ほうきで掃き、それで教会学校の子どもたちを迎えることができた。けれども、雪が降る地域では、土曜日に何時間もかけて除雪をしても、日曜日の朝に雪が積もっていればまた、時間をかけて除雪をしなければ

は、行く人が「苦労さん。よく雪が降るね」と声をかけてくれる。共に雪に悩まされながら生きている者同士の連帯感のようなものがある。このような思いの交流もまた、「雪国の伝道」そのものであると思う。なお、ある時、四国で伝道に励んでいる牧師が、「年中、教会の庭の草取りをしています」と言うのを聞き、あらためてそれぞれの地域での苦労があるということも思った。各教会における祈りにおいて、そのような苦労をいくらかでも覚え、祈り合うことを大切にしたい。

お互いの苦労を覚え 折り合う

さほかに厳しいことを思う。正直なところ、「この除雪の時間を聖書研究や説教の準備に使えたら…」と思う。けれども、雪国では誰もがその苦労を担いながら生活をしている。除雪をしていると、道

(教団書記 雲然俊美)